

作家の場合

大村伸一

あの作家のことは誰でも知っている。そうでありながら、あの作家のことを知っている者など誰一人いないのかもしれない。

作家と言っても、小説家と呼ぶか詩人と呼ぶかは人によってずいぶん違うようだ。一人の読者がすべての作品を読み終えるには何年もかかるほどあの作家はたくさんの小説を書いているが、その何十倍もの数の詩を書いていることはよく知られている。だから、人は自分の読んでいるものが小説ばかりであればあの作家のことを小説家だと呼ぶだろうし、詩ばかりなら詩人だと呼ぶのだろう。ここでは、そんな幾つもの顔を持つ全体を一人の作家として考えたいから、私は小説や詩などと区別せずただ「作家」とだけ呼ぶ事にした。

それほど大量の作品を書いている作家であれば、小説とも詩とも分類できないものの数も多い。何十年も前に書かれた初期の作品にはそういうものはないのだが、時を重ねるにつれて次第にその表現の多様性は増し、この国の言葉だけでは表現できないのだという作者自身の言葉の通りどこか異国の言葉で書かれたものもある。このごろでは、誰も見た事の無い言語で書かれたものさえあり、その言語はあの作家自身が一から作り上げた言語なのだという噂だ。作品ごとに新しい言語を作るなど不可能だから、それは根も葉もない作り話なのだろう。

あまりにも多くの作品を書き継いでいるので、誰にもあの作家の書いたもののすべてを読むことはおろか、集めることさえできはしない。しかしその作品の価値は重要さを増し続けているから、すべての作品を収集するために国の機関が設立されたという。今や設立から十年以上が経っているが、それでもその機関による収集が完了したという話は聞かない。あの作家の書いたものをすべて読むのには何年もかかると書いたけれども、集めることさえそのような機関ですらなし得ない事業なのだから、実際には人がその人生をどれだけ費やしてもすべてを読み尽くすのは不可能なのだろう。それほど大量の作品がこれまであの作者によって書かれてきたのだし、今も書き続けられている。

あの作家の作品を読むためには書店や図書館に行く必要はない。勿論、書店や図書館に行けばあの作家の作品が幾つもの壁一面に据え付けられた書棚に隙間なく詰め込まれているの

を発見するだろう。しかしそれは初期の作品の一部でしかない。そもそも新しい作品はそんな場所ではなく、例えば新聞を手にするだけで、いつの日付であれどの新聞であれ、あの作家の書いた文章を必ず見つけ出すことができる。他の記事と違い、あの作家の書いた文章であることは一読すれば誰にでも分かる。例えその文章に署名がなくても一読すればすぐに分かるだろう。あまりにも明瞭にそれが分かるので見えない署名が記されているのだと言う者がいるが、署名が見えなくては署名の定義に反するのではないかと反論する者もいる。私は見えない署名というものはあるのだと思っている。見えないということが、透明であるという意味ではなく、例えば文字を紙に定着させているインクの黒の中に微妙に色調の違う黒であの作家の氏名が印刷されているとか、あるいはそのインクの成分の一つとしてあの作家にしか合成できない化学物質が含まれていて、それがあの作家の署名となるのだとか、見えない署名というものはそのようにして可能だと考えている。いずれにせよ、あの作家の文章は誰にでも一目で判別することができ、判別できるのは署名があるからなのかもしれないし、それ以外の方法によるのかもしれない。

あの作家の最も新しい文章は、書籍や新聞のように印刷された媒体の上ではなく、もっと身近な場面で見つけ出すことができる。たとえばどの町にもある商店街のありふれた魚屋に行き新鮮な鰯を三匹買えばその三匹の鰯を包んでくれる紙の裏側に書きつけられたあの作家の文章を読むことができる。意外だと思えるかもしれないが、その包み紙の裏にあるあの作家の文章はあの作家の直筆であり、あの作家特有の筆跡で万年筆やボールペン、鉛筆あるいはクレヨンや筆を使って書かれている。稀にはあるが、切り絵で書かれていることもあり、そんな時は包み紙の切り抜かれた穴の部分から、鰯の尾びれや鱗、あるいは尖った頭部がはみ出し、気をつけないと帰り道、逃げ出した鰯が道の上で世界の破滅を祈っている姿を見かけることになる。

勿論、魚屋の包み紙だけでなく、薬屋のカプセルや畳屋の蓴麻は言うに及ばず、天井裏の電気配線図、公民館の掲示物、ブティックに並べられ斬新なデザインの服を着たマネキンの足の裏、玩具店で売られている安物のランプのキングやクイーンの絵柄の隙間、小学校の生徒たちの小さなあごの陰になる首、市内バスの整理券の数字と数字の隙間など、我々の生活のあらゆる場面で、あの作家の書き連ねた文章を見かけることだろう。そして、それらは例外なく直筆である。万年筆であれボールペンであれ鉛筆やクレヨンあるいは毛筆であれどんな筆記用具を使ってもそのにおいを嗅げば、インクだったり鉛だったり墨だったりする液体がいつも新鮮な書きたてのかおりをさせているので間違いはない。

あの作家は今ではひと時も休むこともなく何かの文章を書き続けている。我々の生活の中

にあふれたこれほど多くのあの作家の文章が、他でもないその証明だ。そしてあの作家の書く文字は、大量の文章を一瞬で書くという目的のために極限にまで洗練されている。なめらかな曲線で構成され屈折した部分のほとんどない文字。一目みれば誰もがその文字の描く優雅な形にため息をこぼすだろう。何かの意味を担えるとは思えないほど繊細で微かなその文字は文字と文字とを区別することなどできないと思ひ込みそうになるほど似通っているが、誰もが一目で区別でき読み間違えることなど不可能なのである。あの作家の大量の作品はこの文字なくしては存在し得なかつただろう。

魚屋の店先、横断歩道の中心、美術館に飾られ誰も触れられるはずのない何百年も前に描かれた肖像画の油絵の具の隆起の影、日に何万枚と渡されるレシートの商品名と値段の間の空白、どこにでも見つけられるあの作家の文章が、明らかにどれも今書かれたばかりだというのに、その近くであの作家の姿が目撃されたという話は聞かない。インクが定着し乾くまでの短い時間の内に、あの作家はいったいどこに隠れてしまうのだろうか。その謎を理由に、あの作家は実在せず、ある種の集団幻想に過ぎないのだと主張する者もないわけではない。しかし、あの作家の残した無限とも言える数の文章と、このみごとに完成された字体、これらまぎれもない自筆の文章こそが、あの作家の存在を証明しているのだということは、誰にも否定できないだろう。

写真店では、まれに現像した写真の中に彼の書いた文章が写されていることがある。書かれたのがいつなのかもはっきりとしないその文字の亡霊は現像が終わって二時間もすれば消えてしまうので、写真店の客はそんな文章が存在したことを想像もできないだろう。現像担当者だけがその文章を目にすることができる。あの作家がカメラのレンズの前で文字を書いたのか、それともレンズの内側で書いていたのか、あるいは現像液に浸ったあの作家が暗闇の中でペンを走らせていたのか、それは分からない。しかし、本当に恐ろしいのは、書かれて数時間で消滅した文章が存在するという事実であり、あの作家の書いた文章の中にはこのようにすでにこの世界から失われてしまったものもあるということだ。

あの作家の作品のすべてを集めるために設立された国家機関は、我々の税金を大量に消費しながらこのように絶対に完成し得ない目的に向かって活動し続けている。今や国民は誕生と同時にあの機関の職員として任命され、生まれてから死ぬまであの作家の文章を収集するという仕事に熱中している。この収集業務に関して国民はすべて国家公務員であり、なんらかの理由によって国籍を失ったとしても、あの機関の職員であるという義務から逃れることはできない。

あの作家の残したといわれる見えない署名の正体を研究し続けた職員の数も多い。彼らの仕

事は、機関が収集する文章が本当にあの作家の書いたものかどうかを判定するという重要な任務であり、それに伴い特別な権限も与えられている。最近では、見えない署名というものは化学物質や微小な文字などといったミクロな世界にはないのではないかという風潮が広まり始めている。では見えない署名とは何なのかというと、まだ定説はないのだが、例えばこの宇宙それ自体があの作家の署名なのだという極端な理論がよく引き合いにだされているようだ。物理法則の中にあらかじめ定数項として埋め込まれたあの作家の特徴が、それゆえにこの世界のすべての物質の中に刻印されていて、そのような物質によって表現されたあの作家の文章もまた、当然のことながら作家自身によってすでに署名されていることになるというのだ。もしもそれが真実であるとしたら、文章だけでなく宇宙それ自体があの作家の作品ということになる。それを間違いだと断定することは難しいが、だからと言って正しいとも思えない。

明らかなことはどんな文章の中にもあの作家の文章が忍び込んでいるということだ。誰が何を書こうとも、その文章のどこかにあの作家の思想が文章となって潜んでいる。文字と文字の間隙だけでなく、文字の上に重なるようにあの作者の文章は這い寄ってくる。ただ、実際にそれが侵入してくる瞬間は分からない。文章を書いている時なのか、ディスプレイに表示される一瞬なのか、文字が印刷される瞬間なのか、それがいつなのか誰にも気づかれないまま、あの作家の文章が入り込んでくる。ある報告によると、世界に溢れている文章のほぼ七割はあの作家の文章なのだという。その報告書の文章の七割がまた、あの作家の文章であることも疑いない。勿論、ここまで書いてきた文章も、その七割はあの作家の文章が忍び込んでいる。それがどの部分なのかは、読んでみれば明らかだろう。

私はあの作家が、単に文章を書くだけでは満たされず、すべての文章を自分の意思で書きたいと願い、その願いを叶えたのではないかと思っている。つまり、あの作家は人であることをやめ、一つの言語になってしまったのではないだろうか。どんな言語であれ、実際に話され書かれた文字列の、常に三割は文法に従わない。文法を知っているのに間違えてしまったり、文法など気にもとめず思うままに言葉を並べたり、あるいは精神疾患により文法に合致した言葉を使えないなど、そういう文法にかなわない文章がどんな言語にも、三割は存在する。だとすれば、あの作家はすでに言語となり、その文法によって残り七割の文字列を自らの意思する文章に変えているのに違いない。だとすれば、「あの作家」という言語で思考している我々はすでにあの作家の影となり、あの作家の思想を書き続ける道具になってしまっているのかもしれない。実感は全くないが、これまで書いてきた文章を読めば、それが真相であることは明らかではないだろうか。

あの作家のことは誰でも知っている。そして、あの作家のことを知っている者など誰一人いない。